九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

官商としての西門慶

日下，翠

https://hdl.handle.net/2324/16802

出版情報：日下翠教授中国文学・漫画学著作集成，1994-09
バージョン：
権利関係：

日下(九)

中国古典小説研究会 1994年9月3日
於箱根神奈川大学箱根保養所

官商としての西門慶

日下　翠（九州大学）

1、『金瓶梅』の描写の特殊性について

「ここまで（西門慶の死まで）は、いかにも明の富豪の生活をありのままに叙している。この後は因果応報で尽きる。」（長沢規矩也、東洋文化史大系第５巻　６）

「作者は、西門慶を描くのに、自分自身の日常生活を反映させた。『金瓶梅』のリアルで克明な飲食男女の描写は、そのためである。」（日下翠「『金瓶梅』作者考」、『中文研究集刊』創刊号、1988、12」）

別資料，(1) をみる．説明．　自己投影，はめ込んだ．

2、西門慶の人物像

西門慶の人物像の不統一性について：

「要するに、『金瓶梅』には、二人の西門慶が登場するのである。一人は『水滸伝』より借り受けた無頼漢。もう一人は、作者の分身と化した西門慶である。」（日下翠「『金瓶梅』作者考」）

新興市民階級？――元々は、市井の武頼漢。薬屋を開いている。

しかし、薬屋の描写は極めて少ない。

何故か？――面白くない。地味だから。重要でない？

金蓮の夫武大を毒殺するのに、西門慶は自分の経営する薬屋から砒霜を持ってくるのである。薬屋の描写は本来必要なはず。→しかし，他の商売の描写は，たくさんある．それは以下のとおり．

3、西門慶の経済的基盤

山東は海に面し、さほど地味の豊かな土地ではない。――農業では金持ちにはなれない。（内蒙湖南）

南北の交通の要。――商業をするには最適。　さて，以下の引用，もっともらしいものは何か？

流通．（1、使用人を杭州へ商売に行かせる（第25回）→ 商売の発展のてがみを送る。→みごとな

2、南京から船で荷を運ばせ、呉服屋を開店する（第60回）　これは，うくに発展もしなかった西門慶の夢の所

3、湖州の絹物を仕入れる（第77回）

金融　4、質屋で大いにもうける（第45回）20回に，2000兩出して開店した。

5、塩の販売許可書（塩引）を手に入れる（第48回）

「われわれは、西門慶の姿に、明代の、特権を行使し、財産を築いてゆく、郷紳の姿を見ることができるのである。」（日下翠「『金瓶梅』作者考」）

4、官商という言葉について

陳詔『《金瓶梅》六十題』（上海書店出版、1993年）

a）西門慶這個人，在官場、在家庭生活中，無疑是個惡棍，魔王和暴君。他在道德法庭面前，永遠是個弱者，難免受人詬罵和憎惡。可是在商業活動中，他的経営

紳士，官とのつながり，実質は，しっかりつながる．

ここは少し，同意できない。それでいてあやしい．父子紅会の発生のもとにもなる．

郷紳にも，上，中，下，とある．

明清，

商業以外，蘇州は工業化，

絹布を産出する．

マルコ・ポーロの紀行に，彼の杭州の状況記述．

手工業，12部門，一部門で，工場の数は千．

一工場に，工人，十～14，又は20～30人

「明清時代の蘇州と軽工業の発達」

清の手工業，

蘇州の金箔作のギルド，1人に徒弟1人

技術が他に伝わることを防ぐ，　2人の徒弟を奴隷としたので，ケンカ．

裏，一般．
工，工匠．布，硫黄，木綿．
商．

思想和分配方法，却要比封建经济剥削的封建制開朗得多，進步得多，具有新興商人的開拓意識。（「西門慶経商的秘訣」 P.25）

b）《金瓶梅》裏的西門慶，原在県門前開個生薬鋪，是個商人家庭出身的破落戸、財主。自從他投靠了蔡太師，当了山東提刑所副千戸，後来又官運亨通，昇為掌刑千戸，関係直通到封建統治階級的最高層以後，不但他的財産翻了幾番，而且他的地位変了，身価也高了。他的封建利益超過了他的商業利益，他的商人意識随之越来越淡薄，官僚習気越来越厳重、終于成為一個地地道道的官商。

官商的特点是凭借官僚的封建特権，利用官場裏的関网，以権謀私，採取不正当的手段牟取暴利。……（「西門慶与明代的官商」 P.26）

c）中国的所以不能像西方那様発展資本主義，就是因為官商源遠流長，根深蒂固，勢力極大，起了阻碍社会進步的作用。（同上 P.27）

d）総之，明代嘉、隆、万三朝官僚経商已不足為奇。《金瓶梅》塑造了西門慶這一形象，為我們樹立了一個官商的様板，其意義是不可低估的。筆者前幾年曾経撰文，過分強調西門慶的“新興商人”的一面，観点偏頗，應予修正。（同上 P.28）

5、郷紳について

宮崎市定「張溥とその時代――明末における一郷紳の生涯」（宮崎市定全集13）

一、郷紳とは何か

……郷紳とは読んで字の如く、在郷の搢紳、すなわち地方在住の知識階級にして官位を持ち、同時に大地主、又は資産家を兼ねたものであるが、この階層が社会に及ぼす作用は三つの面に要約することができる。第一は郷曲に武断することであり、これは土地の弱小民衆の上に権力又は財力を以って影響を及ぼし、意のままに動かす作用を言う。ここで注意しなければならぬのは、この作用は必ずしも常に地方民衆を抑圧するとは限らず、時には民衆の希望を代弁する場合もあったのである。第二は官政を把持することであり、郷紳はその実力によって、地方官庁の政治に圧力を加え、政治方針に干渉したり、その実施に異議を唱えたりすることがあった。これもその結果がいつも害毒を地方に流すとばかりは限ったわけではない。ずいぶん、弱きを助け強きを挫くといった義侠的な行動もあったのである。

第三には更に進んで遥執朝柄、遠方に居ながら中央政府の方針を動かすに至るが、これはどんなことであろうか。この言葉は、先には東林の際に、後には復社の張溥の場合にも用いられている。……張溥については、『明史』巻二八八の彼の伝に、刑部侍郎蔡奕琛が、獄中から、

溥は遥かに朝柄を握る。己が罪は溥に由る。

云々と申立てたことを記し、『東林始末』崇禎十四年六月の条には、同じ蔡奕琛の言葉を、

一里居の庶常にして、党を結び権を招き、陰に黜陟の柄を握る。

といいかえている。一里居の庶常は即ち一郷紳に他ならない。

参考：『中日大辞典』郷紳：旧時、官を辞して田舎に隠退している有力者。勢力ある地主、紳士。